



第2回 THEシガパークビジョン 検討委員会

令和7年12月24日(水)

滋賀県土木交通部都市計画課
公園魅力向上推進室

上田委員長 キーワード：

- ・「**使える**」けれど「**かかわれない**」
- ・**人と人、人と生きもの、人と自然のエコトーン**
- ・**公園の再定義**

1つは「使えるけれど関われない」というキーワード。それからもう1つは、「人と人、人と生き物、人と自然のエコトーン」ということですね。使えるけれど関われないというのは、最近話題の「庭の話」という本の中でも触れていらっやって、今改めて公園が注目されているというふうに思うわけです。また社会を見ますと、公と私分離をして、どんどん分かれて、それぞれが肥大化する一方で、「共に」とか、「コモン」と言われるものが、なんか痩せ細っているのではないかと思います。この「共に」とか、「コモン」って言われるような領域をこれからどう育て使いこなしていくかということが、大事なかなと思う時に、市民にとって公園っていうのは、そうしたことの実験やレッスンの場になるのではないかと考えております。

それからエコトーンと申しましたが、一見どっちつかずの曖昧な場所、その曖昧なところが、多様な生き物、生物のゆりかごになったり、命の賑わいを生み出す舞台になったりしてきたと思うのです。そういう意味では、私たちの事業というのは、単に人間のウェルビーイングだけじゃなくて、人間以外の生き物、我々命のウェルビーイングにつながる、そういうまなざしも含む、それを高めるもののことに資するということにしたいなと思っています。公園を利用するペットがいるかもしれない。そのペットみたいな生き物だけじゃなくて、魚も含む、あるいはそこに生きる生き物の部屋みたいなものの視野も大事にしたいということでもあります。

最後は、そもそも公園とは何だったのか、現在何でこれから何になるのかということも確認して議論しながら、この時代における未来における公園について再定義する意欲を持って、あるいはそれを発信するぐらいの意欲を持って議論できると、それにつながって嬉しいなと思っています。

高木委員

課題：老朽化 キーワード：自然体験

特に自然公園の場合は財源的な制約もあって、環境省の補助金を使いながら、少しずつしかできていないというのが現状です。

それからノーベル賞を滋賀県出身の坂口志文さんがもらわれまして、そのお兄さんが言っておられたことなのですが、その方が伊吹山とか、琵琶湖の自然に触れていなかったら、そのような研究はできなかったのかなということをおっしゃっておりまして、やはり公園というのは、特に小さい頃から自然に触れていただくということで、キーワードとしては「自然体験」というふうに思っております。

辻委員

キーワード：おとなも子どもも

私が考えたキーワードというのが、「大人も子供も」というところです。
私は家族単位で公園に来ていただいた方と一緒に自然観察をしたり、自然の遊びをしたりしますが、親御さんが虫苦手とかなんですね。植物の知識もないから、遊ばせるのが怖いなと思ってらっしゃる方とかも結構いて、でも思い返してみたら、自分たちが子供の頃って結構何でも手で触ったり、虫も捕まえたりとか、ボロボロになって遊んでいたかと思うのですね。ちょっと公園とか自然っていうところから、大人になるにつれて離れていってしまうことによって、ちょっと気持ちとか感覚ってというのが離れていってしまうなというのを感じています。実際自分が大人になって子供が生まれて公園に行こうって思った時にどこに行ったらいいのかなとかどんな遊びをしたらいいいかわからないという相談とかもあったりするので、子供から大人になるまでずっとつながって、親しめるような公園っていうのが必要、大事じゃないかなというふうに考えます。

福井委員

キーワード：活用・利用 デザイン 環境、生物多様性 景観

私は造園をやっている専門が緑地計画、景観計画という二つの学問形態を、縦断しながらやっています。

これは誰が「活用・利用」するのかというのをまず一つ考えることと、誰が管理しているのか、大事なことです。もう一つは「デザイン」です。公園にとっての魅力のあるデザイン、どのようなデザインの魅力があるのか、魅力がある空間はどういう空間なのかっていうのを考えるのが大事で、もう一つは「環境・生物多様性」です。公園というのは、実は人間だけじゃなくて、他の生き物が担保される空間っていうのも考えられますので、まず一つ大事な部分だと思います。だから最初に北村技監が言われた、滋賀全体を公園化するっていう話を考えた時に、じゃあ滋賀全体がその多様性として、これ生き物の話ですけど、どれだけの価値があるのかっていうのを考えていく必要があるかと思っています。最後に「景観」です。未来にどうやってこの公園の景観を繋いでいくのかっていうのが大事なかなと。それ全ての課題がたくさんあるので、この検討委員会の方でそれをうまく活用できればいいのではないかなというふうに思っています。

廣瀬委員 キーワード：自然体験と観察 体力づくり 写真スポット

一つ目は、「自然体験と観察」というワードをイメージしました。やはり子どもに自然を触れさせたいなって思いは結構皆さん共通でありまして、どんなところに行けば緑が見られるのか、水辺が見えるのか。親子で心地よく過ごすところっていうと、公園で、大事なところかなと思います。また、発見とか学びである観察とかの視点で、親子がその公園に関われるといいなと思うので、木の名前など案内ボードとかをきっかけに親子で会話ができたらいいなと思うところでした。

2つ目ですけれども、「体力づくり」と挙げさせてもらったのですが、今外遊びが少ないと言われている子供たちの環境の中で、公園で思いっきり走ろうというのは一つのキーワードかなと思います。公園に行って、もちろんお弁当を食べてのんびりするのもいいのですが、こうこう思いっきり体を動かしてみようっていう取り組みができたらいいなと思います。

3つ目は、「写真スポット」です。雑誌を作るにあたっても、見た目や公園の魅力を伝えるのは一枚の写真に残すことで、こんな時あったよね、こんなところに行ったよねっていうことで、笑顔の瞬間などを撮れる場所、残せる場所、家族の思いを残せる場所じゃないかなと思っています。

岩寄委員 キーワード：琵琶湖との一体感 次世代に継承する 行政だけでなく、みんなで担う

1つめは、琵琶湖という存在はどうしても無視できないというか、琵琶湖の周辺を公園が取り囲んでいるということで、「琵琶湖との一体感」。公園がある種のインターフェースになっているっていう考え方ができるのではないかというふうに思っておりますので、ここが一つ重要なポイントかなと思っています。

あと、「次世代に継承する」というキーワードを挙げましたが、これは広い意味でのウェルビーイングにも繋がると思うのですが、やはり生命として全うできる期間というのは、まあ80年とか、まあ長くても百年とか、長い時代の中における、自分たち自身であるっていう意識を持つことがある種の幸せにつながっていくのではないかなと思っていますので、そういった位置づけで考えられるといいのかなと思っています。

最後に挙げたのは、「行政だけではなく、みんなで担う」ということで、こういうのは行政が整備してという形なのですが、今後人口減少ですとか、行政側のリソースの制約とかもあったりする中で、ある種のcommonsみたいな形で、担い手をどんどん広げていくっていうことも、東京ではP-PFIとか、そういった事業で民間企業の参入も進んでいますが、そういったところを広く考えられるといいのかなというふうに思っております。